

センター発足までの経緯と 1990年度の活動報告

センター発足までの経緯

当センターは1991年1月1日に、センター準備室から正式に「国際基督教大学日本語教育研究センター」となった。まえがきに書いたように、センターでは本学教養学部の日本語プログラムと補完し合いながら、研究と教育を行っていくことになっている。

ICUの教養学部で日本語教育が始められたのは1953年であった。以来、入学時に日本語力のまったくなかった学生でも4年間で本学を卒業できることを目標に、必要な日本語を集中的に学ぶコース、Intensive Japanese を設けて教育を行ってきた。その後、1年本科生が多くなってきたころから、学部の講義を受けるために行う総合的な日本語教育とは別のところに焦点をしばりたいという学生が出てきた。つまり、日本にいる間に、日本文化・日本社会に関する知識を得たい、それに必要な日本語を習いたいというものである。これは、1年本科生のみでなく、研究生の要望でもあった。本学ではそれに対応するため、Semi-Intensive Japanese のちに Japanese というコースを併設した。そのほかに、帰国日本人学生のためのコースも設けられている。これは、漢字力、文章表現を充実させる目的を持っている。なおこの間の歴史については、『あすの日本語教育の道を求めて』（ICU日本語教育30周年記念論文集、1985年 凡人社）に詳しい。

しかし、上のような対応だけではまだ学習者の目的にじゅうぶん応えたものとは言い難い。外国人対象の上記の2系列では、時間数の多いコースが4年本科生向きで、少ない方がその他となっているが、1年しかないからこそ集中的に日本語を習いたい者、4年本科生であるが少しゆっくり習いたい、しかも内容は学部で必要なもの、等のさまざまな学び方をしたい学生がいる。日本語を習う目的、方法などを調査してみると、極端に言えば全員が異なる希望を持っているのである。

これに多少応えたものが、従来は夏期日本語講座 (Summer Program in Japanese Language)、1990年度から夏期日本語教育 (Summer Courses in Japanese Language) である。ここでは、さまざまな目的の学習者にある程度合った日本語教育を行っている。これは長らく大学の正規のプログラムではなかったが、1990年度からは、ICUのプログラムとなった。ただし現在のところ学部の単位としては認められていない。現在、センターの事業の重要な部分を占めているのがこの夏期日本語教育の実施である。このプログラムの実施記録として、『夏期日本語教育論集』が7年度分発行されているので参照されたい（最初の6冊までは『夏期日本語講座論集』。プログラムの改称に伴って論集の名も改めた）。

その他にICUの日本語教育がかかえている大きな問題は、学部で行う日本語教

育の単位数が45単位と非常に多いことから、4年本科生の取る科目、例えば一般教育科目に制約があるということである。今日本語プログラムでは、現主任広瀬正宜、次期主任中村妙子を中心に、学部の日本語カリキュラムの検討を急いでいる。学部とセンターとで、補い合ったコースを開くことができれば、4年本科生のモデル・スケジュールを組むのがいくらか容易になるかもしれないと期待される。

ICUの日本語教育全体を考えると、そのような学部との連携を図る一方で、時代の要求に合ったものとして、目的別の日本語にも目を向けなければならない。例えば、文学の日本語、ビジネス日本語、日本研究に必要な専門的な日本語など、そのレベルも初級から「超級」（「上級」よりも上の意）までを視野に入れる必要がある。目的に合っていて、しかも大学における日本語教育にふさわしいものとして、コースの設定、教材の開発を行うわけであるが、そのためには、日本語そのものの研究はもとより、学習者のニーズ調査、日本社会の研究など、幅広い研究が必須であり、それぞれの専門家との協力も不可欠である。

そのようなさまざまな研究や教育を行うためには、学部の枠を超えたところで人材を確保することも必要となる。

これらの輻輳した事情の下に、これまでの学部の日本語教育だけでは対応出来ないことが明らかとなり、センター設置の構想が生まれた。大口学務副学長の諮問によって、1988年12月に日本語教育研究センター設置審議委員会が作られ、ここでの審議を基に答申が出された。1989年6月にはセンター準備室が出来、その後学内の諸手続きを経て、このほどのセンター発足となったのである。

このようにして一応の形は出来たが、解決しなければならない問題も多くかかえている。例えば、内容、レベル、カリキュラムの学部プログラムとの関係、センターの科目が学部の単位として認められるかどうか、夏期日本語教育の学期内の位置づけ、センター組織の確立、人材の確保等である。このように現在はまだ未完成の状態にあるセンターを、今後は順次検討を重ね、必要な措置を講じていくことによって、充実を図るようにしなければならない。

(稲垣記)

発足までの経緯と活動一覧

- 1988. 12. 7 センター設置審議委員会発足（委員長：星野命教授）
- 1989. 2. 20 「日本語教育研究センター（仮称）に関する審議の経過並びに答申書」が大口邦雄学務副学長に提出される。
- 1989. 6. 1 日本語教育研究センター設置準備室ができる。
準備室長として星野命、専任研究員として、Rebecca L. Copeland、田中真理、山下早代子が任命される。
教養学部講師の平田泉、村野良子、尾崎久美子、同特任講師の鈴木庸子がセンター兼担となる。

- 事務局として、国際渉外事務室のKimが兼任となる。
1989. 7. 5～8. 15 夏期日本語講座が実施される。センター準備室と国際渉外部との共催。本年より、ICUのプログラムとなる。
『ICU夏期日本語講座論集6』刊行(1990.1)
1990. 4. 1 星野教授の退任に伴い、準備室長の後任として稲垣滋子が任命される。
1990. 7. 3～8. 17 夏期日本語教育(改称)が実施される。新たに作成した初級用教科書(試用版)を使用。
『ICU夏期日本語教育論集7』刊行(1991.2)
1991. 1. 1 日本語教育研究センターが発足。稲垣がセンター長となる。事務は引き続きKimが国際渉外事務室と兼任。
1991. 3. 1 Copelandが人文科学科助教授に、田中と山下が語学科特任講師となり、センター兼担となる。
1991. 3. 8 第1回日本語教育ワークショップ開催(*)
1991. 3. 31 1990年度紀要を発行。
1991. 4. 1より、学部の日本語プログラム担当の広瀬正宜、中村妙子、中村一郎、稲垣がセンター兼担となる予定。
また事務局は、岡田勝子となる予定。

* 第1回日本語教育ワークショップ 1991.3.8 1:00 - 5:00 p.m. H-117

プログラム 挨拶 大口邦雄学務副学長
講演 「であい」 金井 英雄

ワークショップ

- 1 「サジェストペディアと日本語教育」 由紀ジョンソン
- 2 「ACTFLの話しことばの評価」 村野 良子
- 3 「日本語初級用教材の開発に関する諸問題」

発題 中村 妙子

討論 参加者全員

- ・参加者は学内外から44名。
- ・ジョンソン、村野の当日の発表内容は、本紀要の論文()に見られる。
- ・ワークショップの様子はビデオに収録した。問い合わせはセンターまで。